

令和3年8月5日発行(毎月5日1回発行)
第61巻8月号(通巻745号)

風土



8

石川桂郎俳句鑑賞

南 うみを

遠蛙病む子もつとも寝入りたり

（句集『含羞』より昭和二十八年作）
「病む子」とは長男徹郎のこと、この時十二歳です。そんなに丈夫でなかった徹郎が肺の病に罹ってしまったのです。桂郎師自身も幼い頃肺浸潤瘰癧り療養しています。また長女も幼くして肺の病で亡くしています。祈るような気持ちで、毎日を看病したはず。そのせいか今夜は誰よりもぐっすり寝ています。ひと時の安堵の耳に遠くの田から蛙の声がびびいてくるのです。

ほと毛濃き農婦の初湯田を隔て

（句集『含羞』より昭和二十九年作）
桂郎師の家の周りは田んぼで、隣へ行くにも田の畦を伝っていきます。桂郎師は何かの用事で、田の畦に佇んだのでしよう。すぐそここの農家の湯屋から灯りが漏れており、女体が丸見えではありませんか。見るともなしに見えるその「ほと毛」の濃いこと。農婦の健康美に圧倒されて一句を成すに至ったのです。その頃の農家のあけっぴろげな様子が伝わってきます。またこれを句にする桂郎師の大胆さにも驚きます。

神蔵器俳句鑑賞

南 うみを

亀鳴くを桂郎逝きてより聞かず

（句集『氷輪』より平成十八年作）
器師はこれまで幾度となく桂郎師を読んでいます。その中で「亀鳴く」の季語と桂郎師を組み合わせた句が多く見られます。それは桂郎師の絶唱と言える「裏かへる亀思ふべし鳴けるなり」があるからです。桂郎師は死の間際の己を凝視して、「裏かへる亀」に喩えました。桂郎師の死を前にしての自己客観化の精神力に器師は驚愕しました。「逝きてより聞かず」というのは、それ以上の「亀鳴く」の句は無いと言っているのです。器師の師を強く思慕する心が伝わってきます。

墓前祭読経の中を蟻走る

（句集『氷輪』より平成十八年作）
この句には「六月十九日」の前書があります。またこの句の前に「炎天を分けて太宰と林太郎」の句があり、太宰治の墓前であり、「六月十九日」は太宰治の命日であることが解ります。太宰治は桂郎師とは作家仲間として深いつながりがありました。亡くなって半世紀以上になりますが、今炎天のもとを蟻が走り回っています。

麦の秋

南うみを

田の水の濁り消えしと早苗挿す
棚田植う日本海に尻向けて
早苗田の水かげろふが蔵のぼる
桐咲いて棚田ひねもすさざなみす
子つばめにぎらつく田の面ありにけり
瀬頭の暮るるに間ある河鹿かな
でで虫の子にしてしるき銀の道
観音の臍を見にゆく麦の秋
老鶯を右にひだりに目張りずし
むんむんと山のふくらむ梅雨入かな
田の泥をうねらせつるむ梅雨なまづ
籠り居る黴と老斑増やしつつ



竹間集

同人作品



竹皮を脱ぐ

間島あきら

余花一つ身ぬちの芯に灯を点す
藤房の空濁らせてをりにけり
啄木の旅路おもほゆリラの花
六月の鏡にのぞく己が顔
救命センター真つ直抜ける夏燕
田一枚みづわの芯に通し鴨
竹皮を脱ぐ水平線を視野に容れ

新緑

内藤静

新緑の息吹の中やさざれ石
柏槿は炎のかたちして茂る
日覆ひの雲を呼びたり花あふち
臨済の門から門へ緑さす
飛魚や遠流の島のはるかなる
虚子像の鼻に親しみ藤若葉
ひとつばたご咲いて声明昂りて

八十八夜

土井ゆう子

小さき門くぐり出会へる牡丹の芽
陽炎の野や足弱の吾の行く
瀬の音を廻り道して水芭蕉
起き抜けの自己流体操五月来る
八十八夜触れて冷たきふくらはぎ
山菜の茹でて五月の色となり
美容院の吾を無視せる熱帯魚

アマリリス

森高武

家中に苺煮詰めし匂ひあり
弁当の身欠き鯨は味噌多し
小走りに朝の通学時計草
アマリリス斜めに伸びてしまひけり
新緑の庭顔見世の画眉鳥来
移り鳴く老鶯家を一周す
金亀虫かなり悪さをしてをりぬ

菖蒲太刀

浜福恵

あの子この子にゆき渡りたる菖蒲太刀
指艾さしもくさ加へととのふ菖蒲風呂
廃坑口の重き鉄扉や蝉の声
トロッコ道の潰えて久し竹煮草
恍惚と羽化のはじまる黒揚羽
立ち姿の美しうなり花茗荷
枇杷熟るる橋のたもとに鳴らしき

聖五月

門伝史会

すれ違ふ少年の息聖五月
片頬に新緑の翳磨崖仏
若葉冷帽子目深に測量士
筍の十二単を真二つ
春愁や繰りて当てなき旅の本
鎌研ぎて試されてゐる夏蓬
草むしりいつしか余念なかりけり

沙羅の花

鈴木石花

震度三の地震に呼ばれし昼寝覚
白シャツの子等と画面に笑み交す
競馬場跡地の病院芝青し
生れ乍ら矢筈模様の青薄
本堂の左右を灯す沙羅の花
来る筈の人待つベンチ蝸牛
コロナ予防注射日決まる麦の秋

更衣 山田暢子

散歩とは蛙の合唱聴きにゆく
家中を開け放したり麦の秋
衣更ふ今年も越へし夫の齢
昼寝より覚めて時間を見失ふ
嫌はれてみてまたふゆる八重葎
百合の香やたつた一人のバースデイ
梅雨入りの素振りか空の色変はる

初夏 岩木茂

大胆な物言いをするサングラス
カンテラの火に虫飛んで来る夜釣り
水一本リユックに遊ぶみどりの日
瀬音より抜け出してくる河鹿笛
初夏の水田を風の転がれる
飛魚とぶや紺の漲る日本海
人に齡松に年輪緑立つ

深山わらび 小林輝子

家裏に居場所広ぐる山荷葉
残り鴨身震ひ弾く水七色
戸の口に実生の栗の遅若葉
丈ながく深山わらびを折る息子
青葉山いづくかに夫待ち居らむ
花あやめ夫の一年忌ひらく
乾されあるゴム長靴に蜥蜴入る

麦秋 田中佐知子

どの畦も墳に行き着く麦の秋
麦秋や解体新書初版本
縄文の土器の弁柄麦の秋
黒揚羽消えて光悦垣残る
杉木立のぼるほかなき蚩かな
兄の写真どれもモノクロ夕涼し
上京の雨の三鷹や太宰の忌

樟若葉 中村洋子

風うけて空を騒がす樟若葉
新緑の舟ごと染まる川下り
火のガラス回す工房若葉風
真打の肩をすべらす夏羽織
航跡の十字V字やあごの飛ぶ
指吸ひてまどろみの子へ緑さす
酸味ややまさる珈琲夏はじめ

花菖蒲 橋添やよひ

来合せて法然遠忌花は葉に
知恩院の七不思議の絵夏めきぬ
家光が中興の寺楠若葉
薫焼きの旨しよ土佐の初鯉
新茶汲む夫ぬるやうに話しかけ
母まさば百十五才母の日来
凜として防ぐ誤嚥や花菖蒲

植田澄む 浅田光代

この山も富士の名を持ち植田澄む
鉄線に覗かれてゐる素面かな
川波のしづかに立ちて祭前
散り敷いてひとつばたごの花の数
ランドセルに吊る物あまた風薫る
なんじやもんじや何か秘してはいないか
ぎしぎしに來て少年は亀放す

新古書 柿沼盟子

竹増えし山に鶯來ずなりぬ
猫の子の小首かしげて踏み出せず
菊芽挿す父と額を寄せ合ひて
ぶらんこを漕げば柳絮の寄り來り
防空壕いまだ口開け青嵐
裾はまだ脱がずにをりぬ竹の秋
麦秋や新古書といふ本を買ひ

花大根

高村令子

万緑の山を砦に無人駅
一部始終雲に見られて畑を打つ
風拾らひ蝶々拾らひ花大根
蝸牛嶺を離るる根無し雲
言ひわけの児の目力や柿若葉
自分史の中に亡夫生く青田風
手抜きして過す残生冷奴

更衣

土井三乙

沢水の停るところ水芭蕉
夏兆すシートに選ぶ切手にも
風薫る水の地球のトくるみ
松に来て五月の風に声のあり
人体の真中に臍夕郭公
初夏の風や鳶の輪をひろげ
午後晴るる予報のありし更衣

花蜜柑

林いづみ

陵のふところ深し雀の子
三方に水音めぐらす夏座敷
樽咲く豊洲市場の大通り
夏燕朝のせり場の浄め塩
島つなぐ渡船の笛や花蜜柑
仏心を宿す鈴の音涼しかり
雨だれを見てをり実梅落ちてをり

竹の秋

小林共代

竹の秋垣に遠州作とあり
祖師堂に少し離れて白菖蒲
殿塚に添ふ姫塚や夏椿
あめんぼの壁泉跳んで登りけり
水中花昨日も今日も宇宙論
蛩飛ぶ今に残れる川関所
月見草北上河原昏れのこる

山河集

同人作品



南うみを選

久慈川の水満タンの水鉄砲
走り根の岩に食ひ込む溽暑かな
初夏のバイクを磨く和尚かな
蝶の息はたと止みたる真昼かな
緑蔭の渦の中より喉仏

山田健太

学僧の二段飛ばしに夏初め

森田節子

五月富士雲を払ひて雲のいろ
雨蛙浮葉の臍に紛れたり
日を浴びて香のふくらめる花朱戀
急くもありスローダウンも蟻の列

はつ夏のレンズに探す月の谷
水茄子の藍美しき昼餉かな
緑さす実験室に白衣の子

塚原信代子

ハンカチのかくあるべしと真四角に
仕舞ふとは洗ふことなり更衣ふ

渡辺やや

水撒きて暴れ御輿を待ちにけり
友人もその友人も祭客
風掴み波を掴んでつばめ魚
教会へ続く坂道あご干さる
巫女袴脱ぎし少女の素足かな

谷田明日香

矢車を鳴らして真夜を風一陣
ひと跨ぎほどの棚田を植ゑにけり
深山田の畦に一本桐咲けり
石南花や山氣しづかに降り来る
石のごと鎮もりをれば河鹿鳴く

風土独語／南 うみを



れが「二段飛ばし」です。寺の磴をぐいぐい駆け上がったいく「学僧」に、「夏初め」の風がさわやかです。

大樗天をゆさぶり走り梅雨 奥田 茶々

緑蔭の渦の中より喉仏 山田 健太

俳句の世界は作者が描いて読み手に伝える方法と、読み手に描かせて完成させる方法があります。この句は後者です。どう描いたらよいかか鍵になります。「緑蔭の渦」は緑蔭が渦巻いているように見える景です。若葉の木立を風が渡り、木洩れ日がざわざわと揺れ動いています。「喉仏」は人物の喉仏だけに焦点を絞り、こちらへぬつと向かってくるところです。「緑蔭」の本意に違和感を加え、成功しています。

空也吹く青水無月の六阿弥陀 小原美美子

「空也」は阿弥陀聖の空也上人です。口から六体の阿弥陀像を浮かび上がらせている空也像は有名です。芭蕉に「干鮭も空也の瘦せも寒の内」の句があり、空也には冬のイメージがあります。しかし、作者は「青水無月」の空也を提示し、冬のイメージを払拭しました。季節を問わず全国行脚した空也ですので、青水無月の頃の布教活動も想像できます。新たな空也像です。

学僧の二段飛ばしに夏初め 森田 節子

この句は若き学僧の勢いと言うものを見事に描いています。そ

「走り梅雨」は梅雨に入る前の、梅雨めいた天候を言います。この句の世界は風を伴った「走り梅雨」です。大樗がわざわざと揺れ、まるで天をゆさぶっているようです。「走り梅雨」の「走り」がダイナミズムを増幅しています。

ハンカチのかくあるべしと真四角に 塚原紀代子

ハンカチを四角に畳むのは当たり前のことです。そこに「かくあるべし」が加わると、この人物の律儀な性格が全面に表れてきます。この人物は全てにおいてそうなのだと思像できます。

風掴み波を掴んでつばめ魚 渡辺 やや

「つばめ魚」は飛魚の別称です。「風掴み波を掴んで」は、飛魚が海上を滑空している様子です。優に百メートルは滑空します。その雄姿を「つばめ魚」とすることで、燕の飛翔をダブルイメージさせました。季語の傍題を巧く生かしました。

打ち出しや風の薫りし隅田川 根岸 善行

「打ち出し」は演劇や相撲などで、太鼓を打って一日の終りを告げること。「隅田川」とあるので両国の相撲場所、また「風の薫りし」から夏場所です。昔も今も隅田川に、打ち出しの太鼓の音が薫風につけて響くのです。

風土集



南うみを選

野面積まるみに触れて山霞 舞鶴 小原美美子

木の芽風なびいてゐたる山羊のひげ

空也吹く青水無月の六阿弥陀

麦星を待みて帰る庚申会

水分の峠田のぼる草刈機

大樗天をゆさぶり走り梅雨 東京 奥田 茶々

窓ごしの母の日面会十五分

物差しのかゆみに届く走り梅雨

宴たけなは土佐の二階の初鯉

丸鏡をみがく帽子屋薄暑光

茹で上げて若苗色のキャベツ巻く 川崎 森田 節子

熱の子にプリンひと匙若葉光

飛魚の塩焼き翼焦がしたり

麦の秋空に乳歯を放り上ぐ

並木道青葉のしづく肩に背に

漣に乗る鶯の谷渡り 上尾 根岸 善行

打ち出しや風の薫りし隅田川

桐の花試歩には少し歩き過ぎ

温泉に首までつかる若葉かな

洩れてくる内緒の話走り梅雨 水戸 山田 健太

風鈴売風を売ること覚えてる 水戸 山田 健太

使はざる納戸の広さ更衣

道草の一人となりて聖五月

人間を止めてしばらく白牡丹

青羊歯の本殿までの女坂 高槻 六車 佳奈

新緑や窓全開にしてひとり

蝌蚪生れて水いきいきと動きだす

水底に日の届きたる五月かな

夕月へ咲きのぼりたる鉄線花

惑る時は香水にほふ男かな